

現代邦楽

響
HIBIKI
2022

NHK邦楽技能者育成会同窓会

2022年3月12日(土)

開演 16時 (開場:15時30分)

会場 渋谷区文化総合センター大和田6階

伝承ホール

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町23-21

ご挨拶

現代邦楽「響」 代表 後藤 すみ子 (2期)

本日はご来聴下さり誠に有難うございました。

この会は、NHK邦楽技能者育成会同窓会の企画による、講習会の成果発表の場として開催する会でもあり、現代邦楽「響」の演奏会は、本日で5回を迎えることができました。

出席者の講習から公演に向けた練習の様子は、進行の度に技術に加え、音楽に向かう姿勢、団結力などが向上し、表情にも明るさが増すのが感じられ、とても嬉しく思いました。

以前、ある著名な方が、——日本は文化の宝庫である。未来に残すべき文化で、守るべきは日本の文化である——と、唱えられたことがありました。明治時代に西洋文明を取り入れるために捨てられた日本の文化も、2013年に世界遺産に認定された「和食」が、それ以来世界で認められ、愛されるように、日本固有の音楽もそうなる日が来ることを願ってやみません。

1956年にNHK邦楽技能者育成会が始まり、55期をもって終了致しました。以後は、卒業生が集まりNHK邦楽技能者育成会同窓会の名で活動を始め、昨年で10周年を迎えました。この会の会員は、減ることはあっても増えることのない会ですが、日本音楽伝承のため、精一杯努力していきたいと思っております。

〈2021年10月・11月 講習会〉



「四重華一番」藤井凡大作曲
講師 後藤すみ子先生



「ディヴェルティメント」佐藤敏直作曲
講師 石川憲弘先生

育成会の頃 ～藤井凡大先生との思い出～

横山 裕子 (29期: 箏)

正派音楽院を卒業、同研究科に進むことが決まり、かけ持ちに不安を抱きつつも、NHK邦楽技能者育成会を受験したのは、もう40年近くも前の3月でした。ソルフェージュの試験で渡された8小節の課題（#がいっぱいで焦った）を順番が来るまで頭の中で必死に歌っていざ本番。絶対音感がない私はキーを高くし過ぎて声がひっくり返ったところで、試験官の一人が「はい、落ち着いて。もう少し低く歌ってごらん」。見た目はコワイおじさん?でしたが、優しく声をかけて下さったのが藤井凡大先生でした。29期の講師は、楽典・杵屋正邦先生、日本音楽史・上参郷祐康先生、そして五線譜合奏・凡大先生。入学まもなく、NHKの連続人形劇「新八犬伝」の音楽担当が、実は凡大先生であることを知り、私が中高校時代よく見ていたと申し上げると、テーマソング「♪夕焼の空を～」と口ずさんで、坂本九さんとのエピソードなどを話して下さい、とても厳しいという前評判とは違う先生の一面に触れました。

凡大先生の指導は本当に厳しく、ダメ出しされるお声がとても大きくコワかった。その源は、胸板の厚さ!?先生は私の正面に立ち、「ちょっと手を」とご自分の胸の幅に私の両手を持ってくと「動かすなよ」とくるっと90度回転。すると驚くなかれ!同じくらいの幅なのです。また授業が終わると時折お気に入りの喫茶店、渋谷駅前の「さくら」に誘って下さいました。たばこを美味しそうにくゆらせ、音楽やいろいろな話題（時には宇宙人の存在を信じるか?etc）を本当に楽しそうに話してくれました。

育成会の期末試験（筆記や実技）を無事に終え、卒業演奏会に向けて凡大先生が書いて下さった新曲は「変容21」。合奏練習が思うようにいかず、何度か先生の指揮棒が飛んできたこともあり、受講生はみんなピリピリしていましたが、曲名発表の時先生が「君たち、何かヘンよ～」とおっしゃったのには一同、コケました!

さあ本番、私は十七弦で、指揮される先生のすぐ前の位置でした。この演奏会でみんなともお別れ、力を出し切って演奏したいと私たちは一生懸命。先生もすごい迫力で私たちがグイグイ引っ張ってくれます。後半の盛り上がり、十七弦が力強い音で目立つところ、練習で間違えたことのないところを大きな音で間違えてしまいました。ああ、本当に情けない、悔しい。先生はよく「百回の練習で間違えないところも一回の本番で間違える、それが本番だ」とおっしゃっていて、まさしくその通りでした。演奏後先生に謝りましたら、なんと「思いきりのいい音で間違えたんだから、いい!」と笑って下さったのです。先生の温かさに涙が出ました。

大きなお身体に大きなお声、とても繊細で少し神経質?ものすごい博識で何にでも興味を持たれ、尽きることのないお話にいつも驚かされ、楽しませていただきました。もちろん音楽についての大切な話も惜しげもなく聞かせて下さいました。一つ私が聞けなかったのは、先生ご自身が弾かれる箏の音色、先生のご自宅に伺ったわずかな人しか聞いたことがない音です。爪をはめず指で弾かれるというその音色と音楽は、とても深くてスケールの大きいものだったと。聞きたかったなあ・・・。

亡くなられてもうすぐ30年、先生を知らない卒業生もいますが、藤井凡大という稀に見る大きな存在が、NHK邦楽技能者育成会を支え、まさに私たちを育てて下さったことを記憶に刻みたいと、切に願っています。凡大先生、ありがとうございました。

「NHK邦楽技能者育成会後継組織についての雑感」

山口 賢治(39期:尺八)

あるジャンルが社会的に認められるためには権威が必要だと考えます。日本の伝統音楽においても同様に、その価値や意義を多くの人々や公的機関に認識させる根拠としての権威が存在します。人間国宝は代表的な例でしょう。NHK邦楽技能者育成会（以下、育成会）も権威のひとつであり、それが失われたことはとても残念です。

育成会があった時代においては、レコードを出したりテレビやラジオで放送される機会を有する演奏家は限定的でした。それゆえ一年間頑張って勉強してきた演奏家の卵たちにとって、NHKがバックアップし、卒業時の演奏会がラジオで全国放送されることは大きな成果と実績になりました。育成会を卒業することは、邦楽演奏家としてのライセンス的な意味を持っていました。

育成会が閉講した理由としては、邦楽学科を設置する音楽大学が増えたこと、ネット社会の発展によって様々な情報や教材、教育機会が得られるようになったことなどが挙げられます。今は安価でCD制作が可能となり、誰でもYouTubeに演奏をアップすることができます。現在でもNHKの邦楽番組に出演することの意味が大きいことは言うまでもありません。しかし情報発信手段が一部のエリートから大衆に解放され、NHKなどの放送局を通じなくとも自由に情報発信できる現代においては、かつての育成会の持っていた放送機会が大きなセールスポイントにならなくなってしまいました。

育成会の復活やそれに準じる教育機関の新設を望む声を聞きますが、現代における権威ある組織を設立するには、その権威をどう作るかについて議論し考える必要があります。かつて総会で提案された同窓会のNPO法人化や邦楽演奏者ライセンス制度などが、まずは具体的な手がかりではないかと感じています。育成会創立当初は家元クラスの関係者を集めてスタートしたと聞いています。如何にして教育システムと権威を作るかの戦略的な観点は敬服に値し、その後の歴史を見るに創立者や運営者の慧眼を感じざるを得ません。

近年、中国で尺八が盛んになっています。中国人尺八演奏家が台頭し、安価で高性能な樹脂や金属製の尺八が次々と開発され、製作されています。日本の伝統音楽を学ぶために日本の音楽大学に留学する中国人は増える傾向にあり、且つとても熱心です。尺八のみならず竹笛奏者が日本の横笛を、古箏奏者が日本の箏を勉強しに来日しています。今後はドクターを取得する者や中国人作曲家による日本の伝統楽器のための新作が産み出されてくると予想しています。

日本では師範などの免状に対する価値がかつてほど重要視されなくなっている実感があります。しかし知人の中国人の話を知っていると、中国では免状や学歴、ライセンスなど自分が有する権威の裏付けをとても重要視しているように思われます。

育成会の後継組織の設立を目指すのであれば日本国内だけでなく国際的な視点に立ち、学びの機会を提供できる体制が必要です。特に中国向けに、人を呼び込むための戦略が重要となるでしょう。

program program

1. ディヴェルティメント

佐藤敏直 作曲

2. 四重華一番

藤井凡大 作曲

響

現代邦楽

HIBIKI
2022

3. 茉莉花

牧野由多可 作曲

4. 三味線協奏曲

長沢勝俊 作曲

NHK邦楽技能者育成会同窓会

1 デイヴェルティメント 〈1969年作品〉

指揮	石川 憲弘 (26期) [32期~39期講師]		
打楽器	富田 慎平 (賛助出演) 佐藤 秀嗣 (賛助出演)		
尺八	岩本 みち子 (51期)	原郷 界山 (44期)	山口 賢治 (39期)
篠 笛	竹井 誠 (27期)		
三弦Ⅰ	一色 美枝 (34期)	竹澤 かほる (27期)	吉岡 五月 (55期)
三弦Ⅱ	合田 真貴子 (34期)		
箏Ⅰ	中畝 詩歩 (48期)	古宮 春海 (31期)	五本木 茂美 (39期)
	五味 静子 (7期)		
箏Ⅱ	菊池 美恵子 (27期)	牧野 広美 (35期)	麗明 智翔 (48期)
十七弦	高須 真穂 (32期)	阿佐美 穂芽 (55期)	

佐藤敏直（1936～2002）作曲。日本音楽集団第10回定期演奏会（1969年・朝日生命ホール）にて委嘱初演されたこの曲は、プロ・アマ問わず、現在も再演多数の絶大な人気を誇っています。

この「デイヴェルティメント（Divertiment: 嬉遊曲）」を作曲した当時、「邦楽器のための作曲がやっと二つ目、はじめての大合奏曲であり、いろいろなリサーチと難行苦行で仕上げた。モーツァルトやハイドンらが好んで作曲した娯楽音楽的性格の器楽合奏スタイルにあやかり、これまで閉ざされてきた邦楽を、自由に率直に人間の叫びを表現する開かれた音楽へ解き放つことを意図した」と作曲者は語っています。

第一楽章は箏の軽やかな運びに乗って尺八がのびやかに抒情的な主題をうたいます、四拍子と二拍子の複合、短調傾向が特色です。第二楽章は管の三パートが主役となってミステリアスな楽想が展開され、第三楽章はいきなり勇ましいアタックとシンコペ・リズムのパターンで轟進するロンドのような舞曲となっています。五音階を基調に諸楽器が戯れあい、主題を回想したり、短いエピソードを挿みながら澁澗と昂揚し続け終わります。

（日本音楽集団 35 周年記念 CD 解説参照、一部抜粋）

2 四重華一番 〈1986年作品〉

三弦	井上美和 (55期)	吉岡五月 (55期)	
箏 I	井上千恵子 (15期)	生山まなか (44期)	五味静子 (7期)
	阿佐美穂芽 (55期)	大澤善子 (18期)	
箏 II	高須真穂 (32期)	伊藤厚勢 (12期)	菊池美恵子 (27期)
	古宮春海 (31期)	馬場千年 (54期)	
十七弦	福本礼美 (54期)	横山裕子 (29期)	

1986年、NHK邦楽技能者育成会第31期生の卒業演奏会のために作曲された。

「四重華」という曲名は、三弦と高低2群の箏と十七弦を加えた4つの弦楽器群が合奏の華を咲かせるという意味である。

軽みを帯びた平易な曲であるが、端的なリズム、端的なメロディーが緩急の変化と共に複雑に組み合わせられ進行する一楽章形式の曲である。

(正派公刊楽譜より引用)

邦楽界の最新動向がひと目でわかる情報誌

毎月1日発行・A4判・770円

(同内容同価格のデジタル版もあり)

お得な定期購読がオススメ(送料弊社負担)

邦楽ジャーナル

(有)邦楽ジャーナルは
【出版・通販・イベント】
3つの柱で運営します。

◆月刊情報誌「邦楽ジャーナル」の発行

◆1900アイテム余の邦楽CD・書籍等の
通信販売「HOW」の運営
<http://hj-how.com>

◆コンサートやワークショップの制作



現代邦楽

響

HIBIKI
2022

〒203-0054 東京都東久留米市中央町6-2-5 代表・田中隆文
TEL042-472-3870 FAX042-420-1099 info@hogaku.com

3 ^む ^い ^か 茉莉花 〈1964年作品〉

尺八	山口賢治 (39期)
箏 I	高須真穂 (32期)
箏 II	横山裕子 (29期)
十七弦	福本礼美 (54期)

此の作品は、昭和39年10月7日、「邦楽4人の会」第九回定期演奏会に於て演奏されるため、同会より要請を受けて作曲したものである。「茉莉花」とは、和名を「茉莉(まつり)花(か)」(原文ママ)ともいい、その起源は古く梵語の Milika に発するもの。インド原産で美しくまことに香気たかく、厚い白色五弁花で多く詩歌に詠われ、また、美しい物語り等もあるとか。日本に渡来したのは慶長19年島津家久が徳川家康に献じ、また享保6年には長崎にも伝えられたよし。この作品はこうした南の国で生まれ、我が国に飛来し同化していった茉莉花のもつ深い美しさと魅力を、そのまま今日の邦楽器そのもののひびきとして、またこの作品の象徴として考えられたものである。

私が此の曲を作曲した当時、私自身の邦楽器に対する考え方を次のように記している。即ち……これらは全く私等自身の楽器なのであり、いわば我々の身についた感情とか情緒とかを端的に表現するのに最も適したものであるはずなのです。邦楽器による新しい作品、それはたやすいようですが実は何百年という間磨かれ鍛え上げられてきた邦楽そのものの魅力、また邦楽器自身の持つ個性とひびきを生かし得た作曲というものは仲々むずかしいものと思います。脱皮し新しく行くことは必ずしもそれら伝統によってつちかわれたひびきに背を向けるのではなく、新しい感覚と技巧の中にそれらを前向きに生かして行くことだと思のですが、……と。

曲は一楽章から成って居り十七弦によって示される長い独吟的な旋律が全体を支配するテーマとなって居る。此の作品は四重奏曲ではあるが、各パートのカデンツァ風の独奏部分がかかなり多く、(こうした所にも私の邦楽器に対する考え方の端が現われている) これらが合奏部分との対象を示しつつ前記のテーマをもとにして幻想曲風に発展して行く。

(レコード「現代作曲家の邦楽器による作品 間宮芳生・牧野由多可作品集」作曲者による解説より)

1964年「邦楽4人の会」委嘱作品

4 三味線協奏曲 〈1967年作品〉

指揮	石川 憲弘 (26期) [32期～39期講師]		
打楽器	富田 慎平 (賛助出演)	佐藤 秀嗣 (賛助出演)	
琵琶	石田 さと (賛助出演)		
尺八	岩本 みち子 (51期)	原郷 界山 (44期)	山口 賢治 (39期)
篠笛	竹井 誠 (27期)		
三弦	一色 美枝 (34期)	竹澤 かほる (27期)	井上 美和 (55期)
箏Ⅰ	合田 真貴子 (34期)	梅田 佳子子 (33期)	梁井 圭子 (49期)
箏Ⅱ	大泉 一美 (34期)	五月 女雅 (35期)	麗明 智翔 (48期)
十七弦	横山 裕子 (29期)	福本 礼美 (54期)	

バチや、駒や、絃の太さ、大きさを変えながら、我々の心のうらに、生活のすみずみに染み渡っている三味線。そして三味線音楽には、運指の音型を基礎とした成り立ちがあって、演奏はそれに呪縛されがちであった。又、現代邦楽が書かれてきた過程には、作曲家たちのこの楽器に対する無言のささやきが聞こえるようである。この三味線を主役に書いた長沢勝俊は、こうしたしがらみに捉われることなく、日常的な感覚を実に素直にのびやかに音に鳴り響かせる技を生まれもち、作曲家として稀有な存在であると言えよう。

アウフタクトにアクセントを持つ簡潔な音型を中心に細棹の華麗なバチさばきが聞かれる第一楽章。地歌三味線風なポルタメントで色をつけながら南国沖縄のもつ明るくはあるが、物悲しさを秘めた二楽章。そして低音三味線が終楽章を力強く飾る。1967年作品。「三弦と日本楽器によるディヴェルティメント」として初演、その後一部改作され「三味線協奏曲」となる。

(日本音楽集団発行「邦楽現代 第5号」より抜粋)

本公演では、全楽章地唄三味線を使用し、3人の奏者で演奏いたします。

【NHK邦楽技能者育成会同窓会 現代邦楽「響 HIBIKI 2022」】

動画配信のご案内

本日のNHK邦楽技能者育成会同窓会、現代邦楽「響 HIBIKI 2022」の様子は、下記のURLまたはQRコードより、NHK邦楽技能者育成会同窓会ホームページにてご視聴いただけます。

<https://hougaku-ikuseikai.com/hibiki2022>



現代邦楽「響」実行委員会

後藤すみ子（2期 理事）※代表
横山裕子（29期）
山口連山（32期）
高須真穂（32期）
合田真貴子（34期）
設楽瞬山（38期）
原郷界山（44期 監事）
松本宏平（53期 理事）
福本礼美（54期 理事）※実行委員長
井上美和（55期 理事）

[出演]
指揮 / 石川憲弘（26期）[32期～39期講師]
NHK邦楽技能者育成会同窓会会員〈演奏〉

[後援]
東京邦楽器商工業協同組合
公益財団法人日本伝統文化振興財団
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION
(有) 邦楽ジャーナル (五十音順)

[協力]
舞台スタッフ / (株) 琴光堂

[企画/制作]
現代邦楽「響」実行委員会
gendaihougaku-hibiki@outlook.jp

NHK 邦楽技能者育成会同窓会
n.ikuseikai@gmail.com
Fax:03-6800-2102